



教育と自律性

河野理恵
心理学系技官

前号は、シリーズ「筑波大学の将来設計」1：学群教育を考えるというタイトルであった。正直、この課題は私にとってかなり難しい。しかしながら、大きく変貌をとげている社会の中で、筑波大学の教育、研究体制が法人化によってどのように変化するのか、筑波大学構成員の末席に位置している私にも他人事ではすまされない。

掲載された原稿を読んでみると、いずれも大学の変革に対して示唆に富むものであり、学群教育に対する熱い思いが溢れていた。特に片岡先生の「学群教育は大学教育の根幹である」、宮寺先生の「大学人は、研究者でありつつ、教育者の役を引きとることにより、一人二役を演じることになる」、阿江先生の「教官の意欲と活性化がすべてを決定する」、庄司先生の「受動的講義から参加型教育、発見的・選択的学習へ」などが教育の本質についていると思われ、大変興味深いもので

あった。

現在、私は、学生教育にわずかではあるが携わっており、仲間同士でも、しばしば教授形式について話題にすることがある。私たちが考える教授形式は、1. 説明をすること（講義形式）、2. 参考論文や様々な手法などを説明しながら、一緒に論文・実験などを完成させること（演習形式）、3. 質問があった時に答え、できる限り本人主導で論文や実験を実施させること（自律形式）である。講義形式や演習形式においては、教育者側の準備は大変であるが、ある程度コントロールできる利点がある。他方、自律形式は学生の自主性が中心となっており、待つ身の教育者側としては精神的ストレスがかなり高くなる。しかしながら、この形式が学生を最も刺激し、彼らが自ら考え、判断し、決定することを促す教育になっていると感じる。このような教授法は学生の能力育成には大変重要であり、これまで以上に、学群教育に求められていくのではないだろうか。

上記のことを鑑みると、今後の学群教育に大切なことは「筑波大学生としてのアイデンティティを形成し、21世紀を自律して生きることができる学生」の輩出であると認識した。

(かわのりえ 老年心理学)